

多摩川改修の時代（1916～1930）その3

《道路法制定と、六郷橋》

明治新政府は、1869年（明治6）に、「河港道路修築規則」を發布し、インフラ管理の近代化に向けた行政を展開してきました。

道路に関して、多摩川の六郷地点を通るルート（現国道15号、通称第1京浜国道）は、旧東海道であり、1886年（明治18）に1号国道と位置付けられました。

これ以降、内務省は、明治時代に、4度にわたり、道路法の制定に挑戦しますが、うまくいきませんでした。（注1）

1号国道は、六郷橋により多摩川を渡りますが、木橋であり、洪水により破損修理に多大な費用と労力を要していました。このため、1914年（大正3）、強固な永久橋に架け替える計画が始まりますが、第1次世界大戦が勃発し、一旦休止に追い込まれます。

しかし、第1次世界大戦のヴェルダンの戦いにおいて、トラックが大活躍したことから、道路と自動車は脚光を浴びることとなります。またT型フォードの開発で、自動車が普及段階に来ていました。

この背景のもと、ようやく1918年（大正7）、「道路法」が制定されます。（注2）「河川法」制定に遅れること23年でした。道路法制定と同時に「道路会議」（議長は、内務大臣）において、六郷地点を通るルートが、1号国道と改めて認定され、六郷橋の永久橋化が再び動き出します。

そして、1920年（大正9）「道路法」が施工されると、翌1921年（大正10）、六郷橋架け替えを含む「京浜国道改修工事」が着工の運びとなりました。つまり、道路法施工後の先陣を切ったプロジェクトとなったわけです。

「京浜国道改修工事」は、まだ国が直接施行する制度がありませんでしたから、神奈川県が「1号国道改修事務所」を、東京府が「国道改修事務所」を設置し、府県内の京浜国道改修を担当しました。

六郷橋は、神奈川県が担当し、その橋梁設計者は、増田淳（注3）でした。架橋の費用は、内務省土木局が3分の1を負担し、残りを東京府と神奈川県が折半しています。（橋以外の道路改修は、国が2分の1負担）

1923年（大正11）に関東大震災を受け、京浜国道改修工事は、帝都復興事業として予算確保がなされます。こうして六郷橋は、1925年（大正14）に完成し、京浜国道改修工事全体は、1930年（昭和5）に完了しました。六郷橋の管理は、神奈川県が行ないました。（注4）

注1：道路法を制定する動きは、涙ぐましいものがありました。1888年(M21)には「公共道路条例」と「街路新設条例」を成案化しますが制定までいかず、1890年(M23)には、両法案を統合し「道路法案」として閣議に諮りますが了解が得られず、1896年(M29)には、「公共道路法案」として閣議は通りますが、衆院で否決され、1899年(M32)に修正して「公共道路法案」として再挑戦しますが、今度は貴族院で審議未了となってしまいました。

注2：道路法関係の経緯

- 1918年（大正7） 「道路法」制定
- 1919年（大正8） 4月1日「道路法」公布
- 1919年（大正8） 12月6日「道路構造令」と「街路構造令」が制定
- 1920年（大正9） 4月1日 「道路法」施行、「道路法施行令」公布
- 1921年（大正10） 土木材料試験所設置（現国土総合技術研究所）

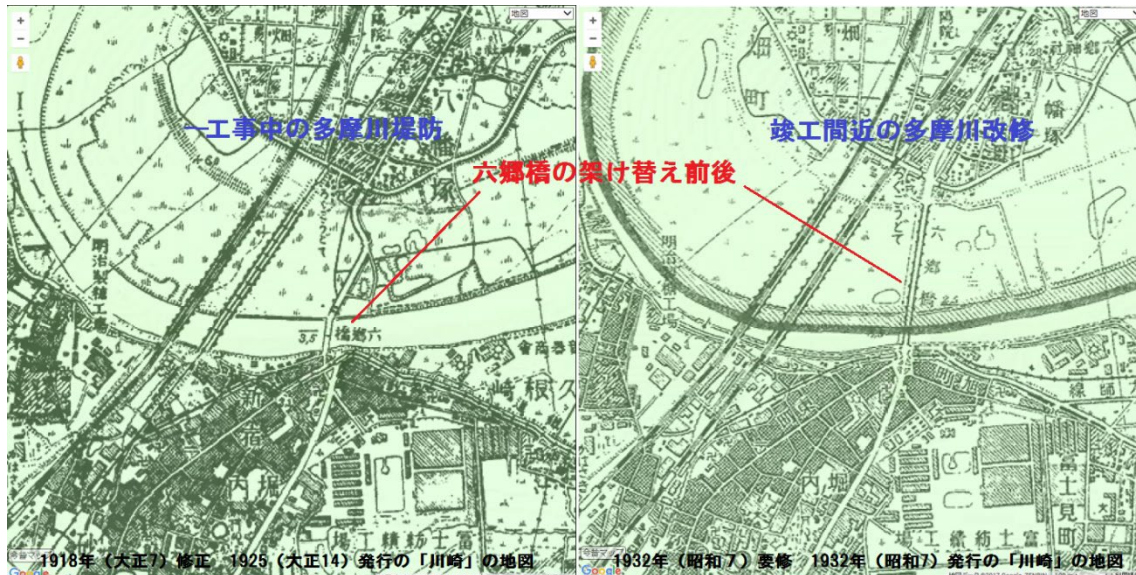
注3：増田淳（生没年：1833－1947）は、東京帝国大学土木工学科を卒業後、15年間アメリカの橋梁設計事務所に勤務し、1922年（大正11）に帰国。その後、橋梁の設計・監督を主な業務とするコンサルタント会社を設立。多摩川では、二子橋（大正14年竣工）が現存し、荒川には、北千住大橋（昭和2年竣工）、隅田川には、白髭橋（昭和3年竣工）が現存。

なお、日本の建設コンサルタンツは、アメリカで実戦を積んだ橋梁設計者に始まり、1921（大正10）に樺島正義が、次いで1922（大正11）に増田淳が、そして1924（大正13）に関場茂樹が橋梁設計事務所を創設し、手薄だった都道府県の道路橋梁設計に尽力しました。また、鉄道橋梁のエキスパートだった田中豊、太田圓三が帝都復興院に抜擢され、道路橋梁設計においても活躍。土木学会の田中賞は、田中豊に由来します。

注4：現在の六郷橋は、1979年（昭和54）から1997年（平成9）にかけて建設されたものです。当時の橋梁遺物は、川崎市側にあった橋門と門柱が大田区に、大田区側にあった門柱が川崎市に残されています。東京と神奈川の間を考えた粋な計らいですね。現在の六郷橋の架け替え工事では、5名が亡くなるという事故がありました。義兄が亡くなった作家の森村桂が詠んだ「鎮魂の詩」が、犠牲者の名前とともにプレートに刻まれ、橋門の門柱に貼り付けられています。

写真は、①六郷橋架け替え前後の地図（今昔マップに細見加筆）、②六郷橋の橋門（大田区宮本台緑地、細見撮影）、③森村桂の鎮魂の詩を刻んだプレート（細見撮影）、④六郷橋の門柱（川崎市稲毛公園、細見撮影）

①



②



③



④

